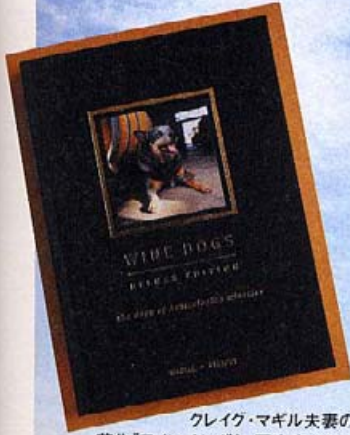


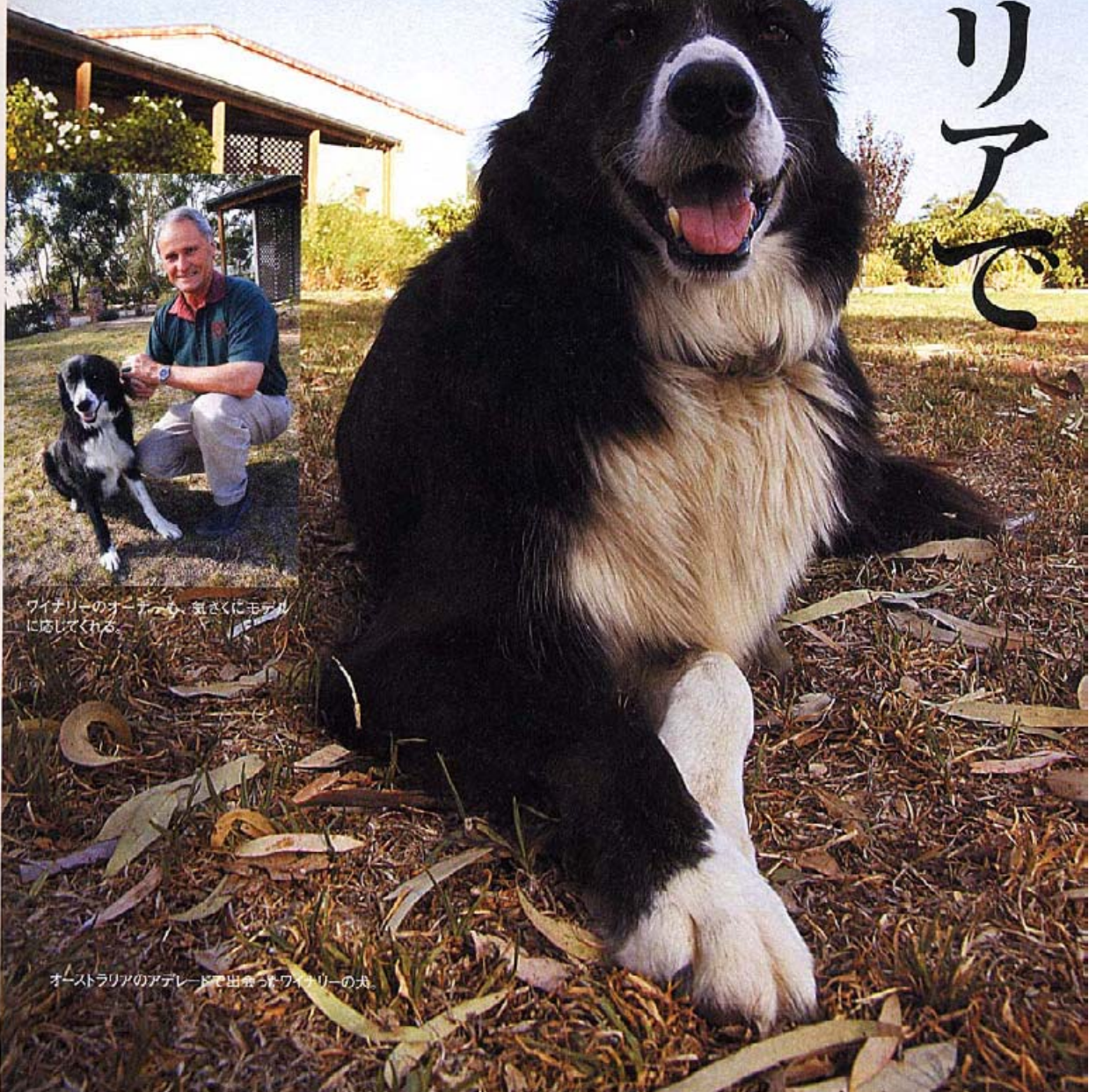
海外レポート



クレイグ・マギル夫妻の著作「ワイン・ドッグ」。写真家むかさ氏のインスピレーションの元になった。

取材・文 バイランド真理子
写真・むかさゆうすけ

オーストラリアで 出会った ワイン・ ドッグたち



ワイナリーのオーナーも、豪らかにモデル
に応じてくれる。

オーストラリアのアデレードで出会ったワイナリーの犬



オーストラリアでワイン三昧

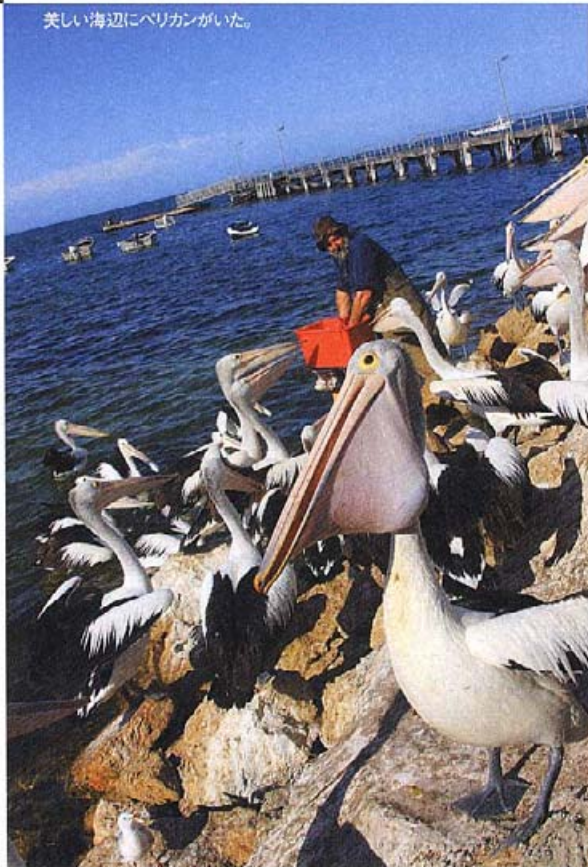
私がオーストラリアに来たころは、ワインを飲む人は少なかった。ワインを飲んでいたのは、せいぜいヨーロッパからの移民の人たちか、上流階級の人くらいしかワインを飲む人たちがいなかったと記憶する。それが、20年経って、ワインはオーストラリアで日常的に飲まれるようになった。

いまや、オーストラリアは世界的に有名なワインの生産国になり、

数多くのワイナリーがオーストラリア全土に散らばっている。フランスやドイツの大企業が買収するほどの大規模なワイナリーから、退職した実業家夫婦が数エーカーの土地を買って始めた小規模なワイナリーまで、大小さまざまなワイナリーがここかしこに存在する。

ビクトリア州のヤラバレーは、かつてはスリーピー・カントリータウン（何もない、眠ったような田舎町）だったが、何十もの小規模なワイナリーができて、そのワインを楽しむためのレストランができ、ついには町

美しい海辺にペリカンがいた。



全体がワインの町になってしまったほど。

小規模なワイナリーは「ブティック・ワイナリー」と呼ばれ、カントリーでのライフスタイルを楽しみながらワイン作りをする人たちが持っている。

カントリー・ライフと犬

カントリー・ライフには、もちろん、犬たちが欠かせない。命名、ワイン・ドッグである。

「週末はワイン・テイステイキング！」

というような人たちにとって、ワインドッグは、彼らを喜んで迎えるワイナリーのコンシェルジュの役割も果たしている。

このワイン・ドッグを何年前か前に日本のテレビ番組が取材したことがあった。その中で、ラブラドル・ドルを飼っていたご婦人は「リタイアしてワイナリーを買ったのだけれど、主人が数年前に亡くなってしまいました。今では、この犬が私の支えです」と語ってくれたことがある。偶然にも、彼女には日本人の友人がいて、毎年彼女が丹精した

海に出れば、イルカたちがダンスでお出迎え。



こちらはコーギー種のワイン・ドッグ。

ワインを友人に送るのだとか。取材陣にワイナリーを案内してくれたのは、そのワンちゃんだった。
ワイン・ドッグにもいろいろな種類がいる(当たり前だが)。ほとんどは、カントリーらしく大型犬。ネズミをとるからと飼われている犬たちもいるが、あんなにノンビリして仕事なんかできるのだからかと思うほどおっとりしている。

さて、ワイン・ドッグたちの写真を撮影して、本にしたのは、クレイグ・マギルさんご夫妻である。奥さんのサラ・マギルさんはグラフィックデザイナーで、クレイグ・マギルさんは、オーストラリアでただひとりのお札のデザイナーだ。ふたりともワインが好きで、犬も大好き。現在は、2頭のアスキューを飼っているという。もつとも、サラさんは、犬好きが高じて、アスキューのブリーダーにもなってしまうらしい。白ワインが大好きというサラさん。ご主人のクレイグさんが好きなのは、ローストダックとピノワールの組み合わせ。ふたりともワインにはまったく目がない。

そして、世界のワイン・ドッグへ

ところで、そのふたりが趣味のワイナリーめぐりをしているときに、どこに行っても犬がいることに気がついた。テイスティング・ルーム、醸造ルーム、犬のいないワイナリーはほとんどないといつていくぐらいだった。そして、犬たちのどれもが、皆、それぞれにいいキャラクターを持っていて、それがまたワイナリーのキャラクターと不思議なぐらい一致している。
ふたりの頭に、ふと「ワイン・ドッグ」



カンガルーがゆったりと草を食む様子が見られる。

『グ』のアイデアが浮かんだ。それが、10年前に1冊の本になり、2冊目になり、今では、ワイン・ドッグのニュージーランド編、アメリカ編、そして本場イタリア編もできた。アメリカは300以上のワイナリーを歩いて写真を撮った。バイリンガルで出版されたイタリア編も人気がある。この本の中には、135のイタリアのワイナリーを歩いて撮影したワイン・ドッグたちがいる。イタリアのワイン・ドッグ、CANI DEL VINO。そのうちに、フランスやスペインのワイン・ドッグが見られるかもしれない。